

テネシー・ウィリアムズの世界

谷 内 輝 雄

I. 人物像——女性像を中心に

心しずかに おやすみなどと 言っでは なりません
怒りなさい——消えゆく光に 怒りをたたきつけなさい¹⁾

ディラン・トマス

(1) 平均的、常識的なものに対する嫌悪

ウィリアムズの作品の中にはきわめて奇異の感を抱かせる人物が多い。平均的、常識的な人物がほとんど居ないと言う方が良いかもしれない。ややその部類と目される人物としては、たとえば『ガラスの動物園』のなかのジム（紳士の訪問客）や『欲望という名の電車』におけるミッチがあげられるかもしれない。ジムは世間なみの立身出世の夢を抱きながら、ヒーローと目されていたハイスクール時代の夢に酔い、うぬぼれの強い自己宣伝に夢中になる青年である。作者の分身であるナレーターのトムは彼を「現実の世界からの使者」、「（登場人物のなかで）ほかのだれよりも現実な人物である」そして「われわれを待ちこがれさせながら、なかなか訪れてこないもの」としてこの人物を象徴的に使うと語る²⁾。しかし劇中で彼が語る過去の栄光と現実の彼とは大違いであることがわかる。大統領の道へ一番近いと仰がれていた人物が今は小さな倉庫に勤め、うだつのあがらぬ仕事を余儀なくさせられている。しかもローラの前で資本の力や技術によって将来は業界の開拓者になるのだと大きな説教をぶつものの最後におさまな退却をする段になると全く子供じみた食わせものの観を呈する。現実の世界からの使者にむしろ軽蔑的な扱いをしている。

『欲望という名の電車』のミッチは、粗野な一連の男たちの中にあっては、ランチのこばを借りるならば、ほかの連中よりましのようなのである。ポーカーに興ずる汗臭い動物の群にも似た彼らの集いにミッチは完全には入りこめないでいる。彼には病身の母があり、その母のことが気になって仲間とのつきあいも思うようにできない。ランチを愛していると告白するときすら、病気の

母がまだ独りものの身である彼を心配していること、そのためにも彼女が必要であることを繰り返す。またロマンチックな数ヶ月の交際の後ランチが過去を持つ女性であることが分ったとき彼は彼女にもう結婚の意思はない、あんたは母と一つ屋根の下に入れるには汚れすぎているんだ、と母に対して大きな甘えん坊であることをのぞかせる。母親を愛していることに何ら悪い点はない。ただ彼には自分自身の意見がない、自分自身の主張がない。恋愛や結婚すら母のためのものである。「あらゆる変化とお互い他人と異なることを恐れ、密集して一つの混合された大きな魂として生存しようとする一階層」³⁾に沈んでゆく人物の一人である。その沈黙物の中に美しさはみられない。

(2) 花火の美しさ

一方ヒーローやヒロインのなかには他と異な^{●●●●●}った人物が多い。精神的あるいは肉体的な欠陥ゆえ現実に対して全く無力ではあるが、そして非現実のなにかにすがりついているのであるが、そこに他を寄せつけない美しさをそれぞれ秘めている。足がびっこで極度に神経質であるため学校もろくろく出ず、したがって職業ももてず醜惡なアパートの中に母と弟と三人ぐらしをしているローラがいる。母と弟のはからいで始めて一人の青年の訪問をうける。その青年が以前高校時代に彼女の憧れていたジムであることを知ると神経が参ってしまって、まともな話もできない。弟トムが電気代金を支払わなかったため途中で電気が消えてしまい舞台はほの暗いローソクだけになる。その暗さがローラをむしろ活かす。しだいにうちとけ、彼女が自分の大切にしているガラスでつくった動物たちを彼に見せる。全体にはほの暗い舞台で彼女はその動物をゆらめくローソクの光にかざすと美しいという。

ローラ：これが一番年が上なの。もう十三にもなるわ……………光にかざしてごらんさい、これ、とても光が好きなの！　ねっ、光がすけて、とてもきらきらするでしょう⁴⁾。

彼女はこの場で、もっとも生々とし、楽しそうで、また美しくもある。この瞬間には彼女の劣等感が消え、現実には彼女がもつ、婚期を逸し、職も持たないという問題は断ち消えてしまっている。

ウィリアムズの代表作の一つ『欲望という名の電車』におけるランチを考

えてみる。今は落ちぶれたものではあるが南部の大農場で生れ育った彼女はヴィクトリア時代的淑女が自分のあるべき姿であるという夢を抱いている。しかしながら大農場や邸宅も身内の男たちの女道楽によってしだいに人手に渡り父母など身内のものの死が相継ぎ、唯一のたのみであったベレ・リーヴ邸も失ってしまう。結婚したものの詩人肌の美少年で、後に同性愛者であることがわかり彼はピストル自殺をする。勤務先の学校の男子生徒にまで彼女の抑圧された性がはげ口を求める。いつの間にか街の女と同様に人の口にはばり、学校は退職させられてしまう。しかしもう一度立ちなおって淑女としての自分を守りぬこうとして、ポーランド人のスタンレー・コワルスキーと結婚している妹ステラのところへ身の保護を求めてゆく。しかし彼女の暗く、いまわしい過去はいつまでも彼女のあとを追っかけてくる。自分が淑女であるための夢を守るためには、虚言でその城を囲める必要がでてくる。少し時代遅れのファッションではあるが、たとえ安ピカものででも彼女は身を飾らねばならず、居候する妹の家までも自分と同様飾りたてる。そんな彼女を数ヶ月の間ミッチは愛するのである。虚言の城にとじこめられる。しかしスタンレーからランチの過去を聞き彼女を棄てる。第一場から飾りたてられてきたランチの夢の世界へ現実の風が吹きこんで、残酷なランチ追放劇がしくまれる。罪のない虚言で身を守らないでは苛酷な現実を渡り切れない女性に、脂臭い動物的一群が攻撃を加えるのである。崩壊寸前になっても彼女は淑女としての体裁を死守しようとする。妹の夫によって精神的にも肉体的にも破壊された彼女は精神病院に送られる。病院より医師と看護婦が戸口までむかえにくる。ランチに紳士が訪ねてきたとユニスが言う。そのときまでランチが語っていたグラスの石油王からの招待の話、妹に「しばらく田舎で保養しに姉さんは旅に出るのね」と言われたこと、それと現実に紳士が訪れてきたことなどがごっちゃになって彼女は現実と非現実のけじめを失ってしまう。周囲の人たちは、とりあえず口をあわせて、とにかく静かに病院側へひきわたそうとする。流行遅れだが一応優雅さをひめる衣裳をまとう。申しあわせたように美しいと周囲が言う。しかし一応自分の言葉を信用しているように聞えるその言葉に安心して、彼女は思う存分淑女ぶりを発揮する。近くの寺院の鐘の音が聞えてくると、「あの鐘の音——この街で清らかなものは、あの鐘の音だけだわ」とつぶやく。粗雑な家具、動物的奇声、罵声に満ちたこの一角を清めるものはたしかにその鐘の音である。戸口へ出ると見知らぬ紳士が立っている。自分の言っていたシェップ・ハントレーじゃないと言って家の中へ駆けこもうとすると、カード遊びをしていた男たちが

手を休めてじっと見守っているのに気づく。わなにかかったと悟ったものの、たくましい腕を持つ看護婦にとりおさえられてしまう。そのときの医師とランチのやりとりを引用してみる。

医師：デュボアさん。

〔彼女は医師を見あげる。その目には必死の哀願がこめられている。〕

（中略）

ランチ：〔弱々しい声で〕

私を放すようにおっしゃって下さい。

医師：〔看護婦に〕

放してあげなさい。（中略）〔ランチは両手を医師の方へさしのべる。〕

医師はやさしく引き起し、彼女と腕を組み、仕切り幕の間を通りぬける。〕

（中略）〔ランチは盲目であるかのように導かれるままに連いてゆく。〕⁵⁾

虚言のなかに彼女が夢見ていた紳士をこの医師の中に見い出したのである。彼はランチの夢を壊すことなく、温い人間味で彼女を包み、汗と脂と罵声の街を去る。ここにわれわれはランチの悲しい美しさを見る。それは俗悪な周囲にひきたてられているだけではあるまい。弱い力ながら一つの淑女としてのあり方を最後まで守り通したものの美しさである。

『夏と煙』のなかのアルマはピューリタニズムを守る砦としての牧師館の娘としての躰を受けた女性であり、彼女の幼なじみのジョーンは医師の子として生理学的に人間を理解してゆこうとする人物である。幼い時から二人は別々の性格をもって成長してゆく。ジョーンは新進の医師として大学から帰ってくる時にはアルマも牧師の父を助けて子供たちに歌のレッスンを施す仕事についている。彼女には精神薄弱の母がおり結婚の大きな妨げとなっている。アルマとジョーンは愛しあいながらも意見は平行線をたどるばかりである。人間には魂を宿らせるような器官は存在しないというジョーン、人間にとって大切な魂であると主張するアルマ、この二人がお互いに相手の意見を理解した頃、あたかも同時に相手の家を訪れ、お互いに相手の不在を嘆くような派目に陥る。アルマは自分を覆っている冷たいピュータニズムを逃れる決心をし、女としての自分を試そうとしてジョーンを訪れる。しかし彼はアルマの教え子の一人と結婚する意思を固めており二人の長年の議論についても、魂を宿らす器官はないが、何か霊的なものがある、それは目には見えないものなので解剖図に

は描かれていないのだとアルマに語る。悲しみに打ちひしがれたアルマの愛を彼は静かに拒む。彼女はすでにビューリタニズムの牧師の娘としての重荷を放棄してしまったのである。ジョーン医師から睡眠薬をもらい、肉体を通りすがりのセールスマンにゆだねてしまう。奇しくも以前にジョーンに誘われそうになり、彼女が拒んだムーンレイクカジノで彼女は生れかわるのである。女性としての肉体の犠牲によってアルマは名前の示すとおり⁶⁾魂となって天子の像やジョーンの心の中で生きてゆくことになる。最後の幕の降りる直前、アルマは石の天子像にむかい、ちょっと手を上げ、別れのあいさつをする。始めて会うセールスマンがタクシーを呼び止める声を聞きながら舞台から観客に別れを告げる。清教徒牧師館の娘として生まれ、その教えに従い、清らかに生きてきた彼女を責めることができない。手のほどこしようもなくただわれわれは彼女の転落を見送るばかりである。一時的に美しく花ひらき降り落ちながら消えてゆく花火をどうしようもなく、しかしすばらしいと思う気持ちに似ている。ただここで生れかわると転落という相反するような言い方をした。アルマは自分の心の中にある人間としての欲望や自我に覚め、それまで彼女を覆っていた律をうち破ったのである。その点では彼女は生れかわったのである。しかし婚期も失い、自分の内部にあるものを歪めさせられていた長い時間が彼女を苛酷な現実の戸口へ放り出してしまったのである。そこに待つものはウィリアムズの中のよくある人物の一人、娼婦なのである。

これら花火のようなという形容詞をつけて挙げた人物はウィリアムズの作品の中の大きなグループをなしている。一体この人物像に彼が何を叫ばせようとしているのかは次項に扱うとして、いまにも消え去るようなもののもつ抒情的美しさを彼は十分に描いている。

(3) この世にはもう慈悲心はないのか

ウィリアムズの各作品は美しさを追求、表現しているのではなからうか。初期の一幕ものには作家の叫ばずにはいられないなにかがある程度明確に出されている。代表作の中に数えられているものには、作家があることを描き切ることを先ず考えているように思える。彼には政治的なものも、宗教的な主張も見あたらない。何かまとまった言葉で強いて言うならば人道主義ということになるであろう。ただここで指摘したいことは、何かを私が漠然と感じていることながら、偶然、初期の一幕ものの「しらみとり夫人」のなかに発見されたことである。

オンボロアパートの女主人が娼婦のハードウィック・ムーア夫人に家賃の催促にやってくる。娼婦はスポンサーであるブラジルのゴム園経営者が何かの手違いで送金をおくらせているので、いますこし待ってくれという。女将はそれをつくりごとだとののしり責めたてる。すると隣室でそれを聞いていた作家と名のる若者が入ってくる。

作家：このかわいそうな婦人をいじめるのは止せ。もうこの世には慈悲心は残されてはいないのか。同情や理解はどうなったのだ。それらはいったいどこへ行ったのだ。神はどこへ行ったのだ？そしてキリストは？ブラジルのゴム園がもしなかったとして、それがいったいどうだというのだ。（中略）たとえこの婦人の生活のなかにブラジルのゴム王がいないとして、それがどうだというのだ。彼女の生活の中にはゴム王が居なくてはならないのだ。この苛酷な現実の欠損をうめるのに、ちょっとした——何といおうか——天賦の——想像力をもってしなければならなかったからとて彼女を責めてよいものなのか？（中略）いいかね、それをこなごなに、それをうそだと叫んで、それであなたは一体どんな満足が得られるのですか？世のなかにうそなんてものはないんだ。ただあるのは、必要という固くにぎられたこぶしで、必要性という冷たい鉄拳でもって、ぐいぐい口におしこめられたうそだけなんだ⁷⁾。

この作家の慈悲を説くひと下りでこのおちぶれた娼婦は快活になる。ここにウィリアムズが強いと言えば人道主義作家であるという拠所がある。その人道主義が平均的、無性格な塊の中に人間が埋没するのを好意的には見ないのである。誇大妄想にせよ、夢のない人間よりましなのである。現実の苛酷さに抗し切れず非現実の世界に庇護を求める人物に対してウィリアムズが、崩れゆくゆえに美しいものを見出し、その弱いものに声援を送る。

(4) “私とっても——淋しい”⁸⁾

神経が繊細すぎて現実の生活に適應できず非現実の世界に迷うヒロインをあげてきたが、その逆の女性像も見られる。それらの代表が前出のステラ、『やけたトタン屋根の上の猫』のマギーである。

ステラは家庭的な女性である。姉の神経過敏な性格と異なり、スタンレーという労務者の性を謳歌する世界に身を投げこみ、野卑なるものに目をつむり、

子供を産み、その中に満足感を得ようとしてゆく。ステラが姉に自分の生活について語るとき、「しかし暗闇では男と女の間には、いろんなことがあるものなの——なんていうか、ほかのことなんか、どうなっても良いというようなものがね」⁹⁾と語る。姉を追放した後で悲しみに興われるものの、スタンレーの欲情に駆られたような愛撫にすべてを忘れてしまう。

「私いつもやけたトタン屋根の上の猫のような感じを持っているの」と語るマーガレットは夫ブリックによれば「とびっ切り上等な女」である。病身のおじいちゃんの遺産にも魅力を感じている。突然夫が性生活を中断してしまったことを嘆くものの、夫がもし他の男の人たちと同じように自分を見るようになれば必ずものの生活をとりのどすことができると信じ、肉体の美しさを彼の前に誇示する。また彼女はウィリアムズの作品群の中では少ない、真実を見るのを恐れぬ女性である。夫の同性愛をまともに知ろうとする。ブリックは、「人に真実をまともに見る勇気があるだろうか」と言っているのとは違っている。そこにはランチやアルマ等に見られない健康な性の会話があり、夫との間に失われたものを必死にとりもどそうとする努力がみられる。

このような娼婦的ではあるが現実生活に根強いものを持っている女性像は、(2)で挙げた女性像とは異なるものである。その他このタイプに属するものとして『ベビー・ドル』のベビー・ドルも考えられる。

II. 象 徴 技 法

演劇はしゅせん人物や行動を説明的に表現するものではなく、実際の人間が舞台上で行動する直接的表現をするものである。音楽の一片や小道具、舞台装置が象徴的に用いられるのは当然である。たとえばガラスでできた小動物たちはそのガラスのもつ弱々しいイメージによって現実社会におけるローラの姿を象徴的に語っている。また『夏と煙』でアルマは噴水のことを、「いつも冷たいの……夏でもそうなの。深い地下からわきあがってくるのですわ」という。これは夏でも冷たい手をしているアルマ、ピューリタニズムという世界を通ってやってくる彼女の冷え切った血液を暗示していると言える。『ガラスの動物園』のナレーターは登場してくる人物を象徴的に用いると説明している。ウィリアムズのその技法は注目に値する。ここでは一つの代表作『欲望という名の電車』の中の象徴技法を考えてみる。

この劇は二つの世界の衝突である。その一つがランチのもつ世界である。彼女は内面的には動物的欲望を秘めた人間であっても、高い貴族文化の世界に

憧れ、自分は淑女として行動しなければならない。原始の昔から考えると人間は文化や音楽をつくりだして、新しい光がこの世に生れている。それを育くんでゆくのがわれわれの責任であると叫ぶごとく現実には内面の欲望に抗し切れないのではあるが、優雅な文化を旗印として行進する——その世界を彼女は代表している。一方スタンレーの代表する世界は内面的欲望を肯定し、動物性的のよこごびを享受してゆき、雄としての本能を満足させてゆこうとする世界である。ボーリングにせよ、ポーカーにせよ彼が他の男たちを圧倒している姿を妻をはじめ、周囲の人間に誇示する。この二つの世界が音楽や舞台装置によって象徴的にあらわされている。それを先ず挙げると；

ブランチの世界：ブルースのピアノ（ソロ）、ボルカ、紙ちょうちん、暗い舞台、歌謡曲（“It's Only A Paper Moon”）など、

スタンレーの世界：ブルースのピアノ（次の効果音をふくむもの）、ジャングルの声、機関車の接近する音、クラリネット、トランペット、原色の色彩など

ブルースのピアノ：作者は、“この界限の生活のふん囲気を表現している”と冒頭で言う。黒人のあの細い指先からよどみなく、憑かれたように流れるブルースは更に次のように考えることができる。ブルースはそれ自体南部黒人の叫び声より生れたものである¹⁰⁾。白人社会に対する反発と同時にあこがれる相矛盾した絶望的な叫びである。ここでは両方の世界を表現するのに役立っている。優雅な世界を求めながら野卑な性に魅かれるブランチ、動物的な欲望を満足させることを第一とするスタンレーが南部の大農場の、貴族的な育ちをもつ女性を妻にする。これらの拒絶しつつ求めあい、求めあいつつ憎みあう二つの世界なのである¹¹⁾。ブルースは単にスティーヴやスタンの登場合図ではない。たとえば第五場でニンフのように若い新聞料金の集金にきた少年に接吻してゆくブランチにはブルースのピアノのソロがあてられている。詩的な言葉をなげかけ、子供に手を出してはいけないと言いつつも内面の欲望に抗しきれないのである。

ブルースがソロになるときはきまってブランチの心の中を表わす。ブルースにトランペットや機関車の音がかぶさってくるとスタンレーの世界を表わす。第一場ではブルースに街の人声がかぶさってゆくと、スティーヴやスタンレーがボーリング場へ行くのに登場してくる。しばらくしてブランチがステラにベレ・リーグを失ったことを告白するとき、ブルースのピアノが聞えてくる。彼

女はステラがベレ・リーヴの一件で自分を責めていると思ひこむのである。第二場でスタンレーにもその件で責められ、さらにステラが妊娠していることを知り、完全にステラがスタンとの世界に入りこんでしまっているのを知り、彼女の中に自分の庇護は望めなくなったのを知る。ブルースのピアノが大きく聞える。第三場、ポーカの夜では些細なことでスタンレーがステラを殴る蹴るの乱暴をする。彼女がユースの家へ行ってしまうと彼女の名を叫びながらおもちゃをとりあげられた子供のようにあれこれ物を投げ出したりする。不協和音の吹奏楽器とブルースのピアノが聞える。四場の終りで妻とランチがスタンレーの下品さを話しているのを外で聞いていた彼がやにわに入ってきて妻を抱きしめ、妻の頭ごしにランチに対して敵意を浮べてニヤニヤ笑いかける。照明がスタンとステラにしばらくのこる。その間、ブルースのピアノ、トランペット、ドラムが聞える。スタンレーの圧倒的力をあらわす。ランチのいまわしい過去を発いたスタンレーは妻が産院に行っている夜ランチを肉体的に破壊する。「かすかに聞えていたブルースのピアノがしだいに大きくなってゆき近づく機関車のごう音にかかわってゆく」¹²⁾。スタンレーの猥力的表現。最終場面でランチが去り、スタンレーは一児の父となっている。実姉ランチを追い出したショックで心まどうステラをスタンは肉欲に駆られたように愛撫する。ランチを拒絶する態度をはっきり示したスタンレーとその世界に安住しようとするステラの生活を表現しているブルースのピアノと減音器をつけたトランペットが幕の降りるまで高まりを続けてゆく。

ボルカ：「ボルカはランチの心の中に流れている。」¹³⁾ この舞踊音楽は洗練された文化に憧れるランチにフィットする。と同時に彼女の同性愛の夫がピストル自殺したとき、彼らはムーンレイク・カジノでボルカの「ヴァーソヴィアナ」を踊っていたのであった。その件以後ランチの墮落がはじまる。心の空白を満してくれるのがセックスであることを知り、姉婦にまで身を望す。劇中では彼女の過去の世界からの密使であり、過去にさぐりが入れられるとボルカが彼女を脅かしてゆく。心の中で執拗に鳴りひびき、彼女を破壊する。技巧的用例をあげてみる。しばしの間愛しあうことになるミッチにランチが夫の自殺の悲劇のことを語る。

ランチ：わたしたち三人（夫とその同性愛の友——著者註）でムーンレイク・カジノへドライブしたの——酔っぱらって、途中ずっと大笑いしながら。（ボルカが聞える。短調で遠く徴かに。）わたしたち「ヴァーソヴィ

アナ」を踊りましたの！その最中私の夫だったその少年が突然わたしをつきとばして外へ飛び出してゆきました。それから数分経つと——銃声が！（ボルカがはたと止む）（ブランチが身体をこわばらせながら立ち上る。やがてボルカが聞えだす。今度は長調で。）（中略）（ミッチがきこちなく立ち上ってブランチの方へ近寄る。ボルカの音が大きくなる。ミッチがブランチの傍らに寄ってゆく）（中略）（彼はブランチに接吻する。ボルカがしだいに消える。）¹⁴⁾

この街ではやや紳士的なミッチに心を許すブランチを描いているのであるが、ボルカは短調と長調の二つに使い分けられている。夫の死が語られる直前は陰うつな短調でボルカが聞こえる。「銃声が！」という声でボルカは中断する。しだいに近寄る二人に今度は長調のボルカが聞えはじめる。しかしミッチの接吻によって密使であるボルカは消え去る。第九場ではブランチは絶望的になっている。スタンレーが彼女の過去をミッチに言ってしまったため、彼女の誕生日のパーティにミッチはついに姿をあらわさなかったのである。再び以前の不安な状態に投げこまれてしまっている。この場の冒頭から「ヴァーソヴィアナ」が頭にこびりついてはなれない。そこへ髭もそらず、仕事着のままミッチが訪れてくる。突然ボルカが止まる。しかしすげないミッチの態度がまたボルカをよみがえらせてしまう。

ブランチ：「ヴァーソヴィアナ」！ボルカの曲——あのときの、アランが——待って下さい！（遠くで銃声。ブランチはほっとする）そう、銃声が！いつもこれでおしまいになるのです。（ボルカの曲がきこえなくなってしまう。）¹⁵⁾

頭にこびりついた四分の二拍子のボルカは払いのけようとしても消え去らない。暗い過去からの使者「ヴァーソヴィアナ」を払いのけることのできるのは銃声（死をも暗示する）であるかまたは紳士の愛なのである。彼女はこれらを求めてこの街へ来たのである。そしてそれが彼女には必要なのである。最終の十一場になると完全に彼女はこのボルカに脅かされ、うちのめされてしまう。

暗いステージ：最初から最後まで舞台はほの暗い。これは異様な衣裳とともに彼女の内面の欲望、墮落をおおいかくすものである。

ブランチ：真実なんて大嫌い。魔法が良いの。そう、そうよ、魔法だわ！
わたくし人に魔法をかけるよう心がけてますのよ。ありのままなんか言いません。真実でなければならぬことを言うんです。あかりをつけないで
♪¹⁶⁾

紙提燈：弱々しい光を放つ時代錯誤的イメージはブランチのためのものである。それがスタンレーによって破り棄てられるとき、彼女はわが身が引きちぎられたかのような叫び声をあげる。

その他、メキシコ人の花売りの声が聞えたり、娼婦の影が映ったりするがこれらはブランチの過去を思い出させるものである。ゆらめくほのおの反射光はブランチの内面的動揺をあらわしている。

一方スタンレーの世界を象徴的に浮びあがらせているものとしてブルースと重なったり相前後してあらわれるものには、機関車の近づく音がある。これは彼のバイタリティそのものである。同様にジャングルの叫び声がある。またクラリネットやブラスがステラとスタンレーの性愛生活をあらわしていることはブルースの項で説明した。単純に行動するスタンレーをあらわすものに、第三場のポーカーパーティの舞台の色彩がある。「原色のように粗野で、直情的で、強烈」な色彩である。

このように二つの世界を象徴するト書きのなかの音や装置が各セリフ以上に雄弁である。ここにウィリアムズの象徴技法のすぐれた一例をみるのである。

註

- 1) 「やけたトタン屋根の上の猫」のとびらに掲載されているものの一部。訳は新潮社版、田島博氏訳によった。
- 2) 「ガラスの動物園」第一場
- 3) 同 第一場
- 4) 同 第七場
- 5) 「欲望という名の電車」第十一場
- 6) Alma: スペイン語で「魂」の意
- 7) 「しらみとり夫人」('The Lady of Larkspur Lotion')
- 8) 「やけたトタン屋根の上の猫」第一幕
娼婦的ではあるが健康な肉体をもつマギーが同性愛の夫にもたらすセリフ。

- 9) 『欲望という名の電車』 第四場
- 10) "Blues have been developed by the Southern Negro from the 'cry' and 'holler' in the first instance" (Encyclopedia Americana vol. 15, p. 768)
- 11) The blues is an expression of the loneliness and rejection, the exclusion and isolation of the Negro and their (opposite) longing for love and connection. Elia Kazan, "Notebook for *A Streetcar Named Desire*"
- 12) 『欲望という名の電車』 第十場
- 13) 同 第九場
- 14) 同 第六場
- 15) 同 第九場
- 16) 同 第九場

テキストならびに参考文献

Tennessee Williams:

A Streetcar Named Desire A Signet Book (The New American Lib.)
27 Wagons Full of Cotton and Other Plays (New Directions Publishing Corporation)
The Glass Menagerie (The Eihosha Ltd.)
Summer and Smoke (Nan' undo)
Cat on a Hot Tin Roof (Penguin Plays)

Elia Kazan:

"Notebook for *A Streetcar Named Desire*" in *THE PASSIONATE PLAYGOER* ed. by G.Oppenheimer (New York Viking Press)